

る空海寺の改築工事に伴い実施した。空海寺は、東大寺大仏殿の北約三六〇m、東大寺旧境内の北端にあり、三笠山西麓から西に派生する尾根の先端部分に位置する。

調査の結果、奈良時代の鑄造関係遺構や室町時代の基壇・井戸、江戸時代の礎

1 所在地 奈良市雑司町

2 調査期間 第九八次調査 二〇〇三年（平15）一〇月～一

月

3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

4 調査担当者 清水昭博

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

今回の調査は、東大寺の北方に所在する空海寺の改築工事に伴い

実施した。空海寺は、東大

寺大仏殿の北約三六〇m、

東大寺旧境内の北端にあり、

三笠山西麓から西に派生す

る尾根の先端部分に位置す

る

調査の結果、奈良時代の

鑄造関係遺構や室町時代の

基壇・井戸、江戸時代の礎

石建物・井戸など多くの遺構を確認した。

木簡が出土した鑄造土坑は、一辺約二・九mの正方形で、深さは残りの良いところで約一・三mを測る。土坑の底には良質の粘土による床面が、その周囲には幅約〇・五mの排水溝が設けられていた。また、排水溝の水を土坑の外へ流すための、瓦を用いた暗渠施設も確認できた。床面の中心には直径約一mの椀状の穴が掘られ、さらにその底には直径約〇・三mの穴を確認した。その性格は不明であるが、中型を支える構造とも推定される。

鑄造土坑からは、整理用コンテナ約三〇箱分の遺物が出土した。

その大半は銅滓・溶解炉片・鑄型片・鑄羽口・坩堝・トリペなど鑄造関連遺物で、他に須恵器・土師器、瓦、木簡なども含まれていた。土器は奈良時代中頃から後半までのものが主体で、鑄造土坑の造作時期に対応すると考えられ、それは東大寺の造営時期とも対応する。また、検出地点が東大寺旧境内の寺域内に収まることから、東大寺の造営に関わる鑄造遺構とみて誤らないと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

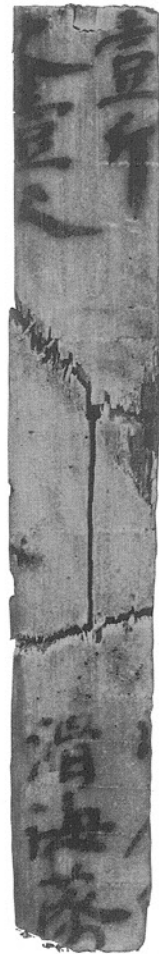
(1)

☐ 十人掘出自☐ 地
☐ 人作露盤伏鉢樋八枚形☐ 十一人銅人

• 壹斤
丈一尺

滑海藻 ☐
☐
☐

(138) $\times (20) \times 4$ 081



(1)



(2)



(3)



(いずれも赤外線画像)

(2)

鳥甘

(60) × (18) × 6 081

(3)

大 従
[鑄工カ]

参伯参カ

(88) × (11) × 6 181

木簡は鑄造土坑から二点が出土している。そのうち釈読できたものを掲載した。

(1)は四片に分かれている。上下両端は折れ、左右両辺は割れて、

本来はもっと大きな木簡であつたとみられる。表面は「露盤伏鉢樋八枚の形（鑄型）」の製作に携わった作業員の人数（上端折損のため具体的な人数は不明）を記し、次にその内訳を二行に分けて記している。木簡右端には別の項目の内訳として「十人は□地より掘り出す」とあり、鑄型に使用する粘土の採掘などの作業に関する記載であろう。粘土の採掘・鑄型の製作など作業の各段階における作業員数とその内訳が列記されていたと推定される。

表面にみえる「露盤伏鉢」（相輪全体の中の伏鉢部分）は、木簡の出土した鑄造遺構を造東大寺司鑄所の作業場跡と考えれば、東大寺の東西七重塔いずれかの露盤伏鉢を指す可能性が高い。「東大寺要

録」所収の「実忠二十九箇条」には「構上東塔露盤事」として「露盤一具 高八丈三尺、第一盤径一丈二尺」とあり、その大きさがわかる。天平宝字六年（七六二）三月・四月・五月の「造東大寺司告朔解」には、鑄所の作物として盤・字須・匏・薄仙花・鐸・匏柄・耳管・冠管・伏鉢・管・伏盤などがみえている（『大日本古文書』編年文書五、一二五―一三二頁、一八八―一九五頁、一九五―二〇一頁）。天平宝字六年四月一日の「造東大寺司告朔解」には「錯作露盤伏鉢一口」とあるので、三月の段階で既に鑄造作業は終了していた。「造東大寺司告朔解」をみると複数の相輪を同時に製作しているようなので、木簡にみえる伏鉢は東塔・西塔のいずれかのものである。とすれば(1)の年代も天平宝字六年前半頃と推定できる。

「樋」は他の史料にみえず不明であるが、木簡の記述内容からみて伏鉢を構成する部品の一つと考えられ、単位が「枚」であるので比較的薄い形状のものと推定される。「樋」を鑄型に銅を流し込むための樋とみることも不可能ではないが、鑄型を製作していることから考えるとその可能性は高くない。

裏面には重量（壹斤）や長さ（壹尺）が上端に記され、空白部分を挟んで下端には「滑海藻」と書かれる。「滑海藻」は、アラメという海藻で、一般に食料として支給された。天平宝字六年四月二日「東大寺鑄鏡用度注文」（『大日本古文書』編年文書五、二〇一頁）にも、鏡鑄造に従事した雑工に支給した食料の中に米・塩・醬などとも

に滑海藻がみえている。この木簡の滑海藻も食料として支給された可能性が高いが、三宝伸銅工業(株)の久野雄一郎氏のご教示によると、海藻は鑄造の材料として鑄型に混入して使用されたかもしれないことである。

このように、この木簡は造東大寺司鑄所における作業内容と従事者数、それに関するさまざまな事柄を記した記録木簡であり、日毎あるいは作業工程ごとにこうした木簡が作成され、「造東大寺司告朔解」などの文書をまとめるための資料として利用されたものと推測される。

(2)は小さな断片で、上下両端は折れ、左右両辺は割れで、原形をとどめていない。裏面は焦げて炭化している。人名「鳥甘」を書いたものであろう。

(3)は上下両端が折れ、左右両辺が割れで、原形をとどめていない。「大鑄工」は不明だが、『東大寺要録』所収の「大仏殿碑文」には高市真国（続日本紀）は高市大國とする）が「大鑄師従五位下」とみえる。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 二〇〇三年（第一分冊）』（二〇〇四年）

（1）7・9 清水昭博、8 鶴見泰寿